

前回の検討委員会の振り返り

令和 6 年10月31日午後 2 時～ 4 時
第 3 回板橋区教育ビジョン2035検討委員会

委員からいただいた主な意見①

■ 幼児期における生きる力の基礎づくり

- 学力で遅れを取ってはいけないという親の考え方により、幼児期の文字の習得が一般化しつつある。
- 適応困難な子どもは学力に問題があるとは限らない。**遊びが絶対的に欠如**しており、失敗を経験しても、その経験から何かを学び、再チャレンジするレジリエンス、人との関わりを通じて互いに成長する意欲、新しいことに対する**好奇心と挑戦精神が必要**。
- 幼児期は、大人に管理されない自由な時間と空間で幼少期を振り返ると、大人に管理されない空間・時間で、子ども同士で群れる中で生み出される関係性が、**非認知能力の発展に役立つ**。
- **幼稚園や保育園は小学校への準備ではない**。幼児期を満喫することが大事。
- 保育園や幼稚園から学校への進学は、学童保育等を含めた生活全般の**シームレスなつながり**が重要。
- 幼児教育施設と小学校が共有できるような指針があれば、小学校以降の問題が減る可能性がある。
- 地域との繋がりを見つめ直し、**地域の力を生かす**ことが一つの方法である。
- 幼児期の教育では**保護者の教育**も必要。

委員からいただいた主な意見②

■学童期以降における、これからの社会を生き抜く力の育成

- ウェルビーイングは教育振興基本計画のキーワードであるが、資料で**具体的な表現が不足**している。
- 「生き抜く力」という表現が強く、誤解を与える可能性がある。
- 学力が広義の意味での「学ぶ力」を捉えていることを示すべき。
- 小学校の授業は、最初の0分から45分の変化を感じる事が重要で、「わかった」「できた」「できなかった」といった実感を、**リアルでないと感じる事が難しい**。
- **個別最適な学びと協働的な学びの「一体化」**による学校の改革が求められている。
- フリースクールに通う子どもで重要な**問題は体力がない**ことである。
- 学びのエリアで一斉授業を行う、一人の先生が複数の学校に授業を提供する、あるいは区の一つの学校が全校の授業を担当するなど**多様な学びの形を取り入れることで、働き方改革にもつながる**。
- 子どもと同様に、**教員も多様**である。個々の教師が持つ力を出し合い、**多様な授業を創り出せる学校組織**が理想である。
- 小学校と中学校の繋がり強化の必要であり、特に**中学校教師の意識改革**が必要。
- 保護者が学力や進学に関する情報を多く持つようになったが、得た情報の整理が十分ではなく、**情報に振り回されている**現状もある。

委員からいただいた主な意見③

■誰ひとり取り残さないきめ細かな教育の充実

- 特別な支援が必要な子どもの増加により、特別支援教育における様々な対応スキルを通常学級にも生かすという意味で、**通常学級の教員の意識も変わってきている。**
- **日本語学級に在籍する子どもが自校に戻った際のコミュニケーション能力**が、今後の課題。
- インクルーシブ教育の枠を広げる提案に賛成ではあるが、それをどのように具体化し、どの場で支援するかは綿密な議論が必要。
- 「**個別最適な学び**」と「**協働的な学び**」は、「**誰一人取り残さない**」という目標につながる。
- 個別最適な学びと協働的な学びは必ずしも対立するものではなく、区内で実践している学校もある。
- 学校規模の定義について、現行のカウント方法が適切かどうかについて、再考が必要。
- 小学校・中学校の存在意義は、**自分とは異なる学習方法や結果を共有**する環境にある。
- 学校におけるウェルビーイングは、**教員のウェルビーイングなくしては実現しない。**
- 慶應義塾大学 大学院の前野隆司教授が提唱する**ウェルビーイングを構成する四つの因子**（「やってみよう」因子（自己実現と成長の因子）、「ありがとう」因子（つながりと感謝の因子）、「なんとかなる」因子（前向きと楽観の因子）、「ありのままに」因子（独立と自分らしさの因子）は、学校教育がめざす価値観と一致する。

■その他

- 成果と課題を、施策と事務事業レベルで整理して提示いただきたい。